

仙台市太白区のひより台団地にある「仙台生ゴミリサイクルネットワーク」では、街路樹の落ち葉と生ごみを活用した堆肥化の取り組みを続けて2024年に25周年を迎えた。

活動のきっかけは「杜の都仙台なのに落ち葉を焼却処分するのか」ということ。有志によって1999年4月に設立された。

活動内容は堆肥化の実験を行うほか、仙台市の委託を受けて、生ごみリサイクルの講師や、町内会・サークルへの出前講座を行っている。

同会事務局長の徳田実さんは「当初は生ごみが上手く発酵せず、悪臭が発生した。試行錯誤して作った腐葉土を混ぜることで、安定して堆肥化できるようになった」と振り返る。

堆肥化に必要な落ち葉は市内にフレコンを設置して回収している。ある日、住民から落ち葉の回収に協力したいと申し出を受けた。徳田さんは「回収に苦労はあるが、我々の活動が認知されたと感じた」と振り返る。

「会員も40人となり、子育て世代や学校の先生、留学生など幅広い。今後は堆肥づくりから野菜の生育・収穫まで体験できる食育活動をしてみたい」と語る。

【記事執筆】 宮城県農業会議

事務局長の徳田実さん



落ち葉堆積場。「回収量はフレコン約80本。10月頃に積み上げた落ち葉がEM菌で分解され、嵩が減った」と話す



堆積した腐葉土の下部にはカブトムシの幼虫が潜む

